

古川叢書



栗山理一
定家伝

古川書房

古川
叢書



栗山理一
定家伝

古川
書房

くり やま り いち
栗 山 理 一

明治42年 佐賀県に生る

昭和8年 広島文理科大学国文学科卒業

現 職 成城大学教授，文学博士

主 著 風流論(子文書房)，古典的感覚(星野書店)，俳句批判(至文堂)，
与謝蕨村集(筑摩書房)，俳諧史(塙書房)，小林一茶(筑摩書
房)，芭蕉の俳諧美論(塙書房)，俳論集(小学館)

現 住 所 横浜市緑区荏田町 470〜7

定 家 伝

¥ 880

昭和 49 年 5 月 15 日 発行

著 者 栗 山 理 一

発 行 者 古 川 篤 夫

発 行 所 古 川 書 房

〒145 東京都大田区上池台 4-29-3

電話・東京 (729) 2 5 5 6

振替番号・東京 4 5 7 7 4 番

印刷・苅部印刷 製本・東雲堂製本

(落丁・乱丁本はお取り替えいたします)

分 類	1392	製 品	0020	出版社	7444
-----	------	-----	------	-----	------

目次

一 夢の浮橋	五
二 紅旗征戎	一九
三 達磨歌	三七
四 定家かつら	六二
五 転機	八五
六 養志	一〇八
七 有心	一二三
定家略年譜	一六五
和歌索引	一七九
あとがき	一八七

定家伝

一 夢の浮橋

大和の国に「夢の和太」と名づける所があり、そこに架け渡された橋を「夢のわたりの浮橋」と称した由が、宣長の『玉勝間』に次のようにしるされている。

夢の浮橋といふは、古き歌に「世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡しつゝ物をこそ思へ」とあるより出でたることにて、夢のわたりの浮橋といふは、万葉三の巻に「わが行きは久にはあらじ夢のわだ瀬とはならずて淵にてあれも」、また七の巻に芳野作とて「夢の和太言にしありけり現にも見て来し物を思ひし思へば」など見えて、吉野川にある夢の和太といふ名所にて、そこに渡せる浮橋なり。

文中に引く「世の中は」の古歌については、宣長も「いづれの集に出でたるかは知らねども、河海抄に引かれたり」とするように、出典・作者ともに未詳である。『万葉集』卷三の引歌は、今日では「わが行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずて淵にあらぬかも」と読まれており、

大伴旅人の作。歌意は、私の旅も長くはないであろう。吉野の夢のわだよ、浅い瀬になることなく、淵のままであつてほしい、となろう。巻七の歌は、「現にも見て来し物を」のところが、今は「現にも見てけるものを」と読まれており、歌意は、夢の和太というが、それは嘘である。なぜならかねて見たい見たいと思つていた私は、この景観を現実に見たのだから、と解しておきたい。「夢のわだ」は吉野川の上流宮瀧にあり、巨岩にかこまれた淵で、当時有名であつたことが、これらの歌でも知られよう。「懷風藻に、吉田連宜が、從^{フニ}駕^ミ吉野宮^ノ詩に、夢淵と作れるも、此所なり」と宣長も指摘している。

浮橋は、筏を組んだり、あるいは小舟をつなぎ、その上に板を並べた仮橋で、その不安揺動のさまは、これを「憂き端」として人生に仮託する思念をさそうものがあつたらう。紫式部が『源氏物語』の終章を「夢の浮橋」と題したのも、浮舟の憂悶転変の相をこの語に集約したと考えられる。

古代の閉ざされた暁闇の世に、いちはやく人生の深い哀愁をたたえたような、この名どころが生まれていたことは、それだけでもさまざまの幻想を誘うものがあつて、私はひさしく心ひかれるものがあつた。

世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡しつゝ物をこそ思へ

この浮橋は、おそらくはいかほでもない小橋ながら、踏み渡るたびごとに物思わせる不思議な宿縁が、いつかはそこに結ばれるようになっていたのであらう。夏は緑青の水を岩の間にたたえ、冬ともなればうすら氷が閉じこめるこの夢の淵に渡された一本の浮橋は、数知れぬ人々がひとしく渡りかね渡りつぐ久しい時を経るうちに、いつしか夢と現^{うつ}のあわい遙かに、心ふかく繋ぎとめられた仮橋ともなっていたのであらう。

世の中は「夢のわたりの浮橋とのみうちなげかれて」とは、『源氏物語』薄雲の巻にしるされた詠嘆であつたが、この浮橋はするように頼みがたく危うい世間に喩えられながらも、なおかつそのはかなさのゆえに、またその美しい思い出のゆえに、たやすくは忘却しがたい頼み心をよせる橋でもあつた。

はかなしや夢のわたりの浮橋をたのむ心の絶えもはてぬよ

はかなさを知りつつも、なお絶えもはてぬ頼み心を詠んだこの『狭衣物語』(巻四)の歌は、宣長も引いているが、ここにはすでに人生の哀歎を回想の世界に捲きこもうとする孤独な心の芽ばえをたどることができる。一人一人が断ちがたい宿縁としてこの浮橋を渡るたびに、そのような孤独を怖れながらも、ある懐しさに引きつけられるような思いが、一筋の微光のようにこの浮橋には託されていた。荒つぽい現実にあつては、容赦なく片隅に掃きよせられるような無力な抵抗

ではあっても、それだけに心の内部へと深く秘匿されなければならなかった小さな魂の誠実がこの浮橋には賭けられていたことになる。

けれども、いよいよとどろと踏み鳴らす馬蹄の響が風塵をあげて、このはかない夢の浮橋を蹂躪し去るときが訪れるようになると、この浮橋も無残に断絶する日を迎えなければならなかった。久しきにわたる公家文化の花園に、突風のごとく坂東の荒武者の駒の蹄が踏みこんだとき、それは夜半の寢覚めに驚く木の葉時雨のごとく遠い思いを誘う珍事ではなくして、眼前に捲きあげられてゆく現実の変改であった。このような暴力的な世相の変改に直面した平安末期の歌人たちは、もとより無力ではあったが、彼らに残された道は、ひたすら退いて傍観者となるか、あるいはその抵抗意識を通して、進んでみずからそのような日の記念碑たらしめるための創造に献身するか、そのいずれかの選択であつたろう。木曾の冠者や坂東武者の鉄蹄がもたらした新しい文化の予兆も、そのときはただ惨烈な破壊として目に映ずるほかはないとすれば、その異常に対処する歌人たちの心ばえとしては、おのれが培われ継承しようとする公家文化への回想に生きるか、または公家文化の残された可能性に対する情熱の燃焼に身をゆだねるかが問われることになる。後者の場合は、いわば自分が最後の光芒となるような、そしてその完成が同時に終焉ともなるような記念碑への悲痛な焦慮が、彼らの心をはげしくゆさぶり掻きたてた結果が、あの新古

今時代の妖しい焰を噴きあげたともいえよう。定家はその中でも選ばれた第一人者であった。

定家が生まれたのは応保二年（一一六二）で、父の俊成が四十九歳のときにあたる。定家の家は撰関家の主流となった北家藤原氏の道長の六男長家から御子左家みこひだりが出て、さらに忠家—俊忠—俊成—定家とつづく。道長からすれば、定家の出現は約一世紀半の後となる。御子左家は羽林家（大納言・近衛中将まで昇進できる家格）を称し、公家の中堅層をなしていたが、道長の時代を離れるにつれて官位も下り、父の俊成の時には正三位非参議にとどまり、ようやく公卿の列から除外されることになった。長家・忠家はともに歌道に深い関心をよせており、俊忠は院政初期の歌壇で俊頼・基俊らとともに活躍し、『金葉集』や『千載集』にも歌を載せている。父の俊成は『千載集』の撰者として、当代歌壇の随一であったことはいうまでもない。

道長以後、撰関の枢要は北家藤原氏に独占されることになり、身分の固定化が判然とするようになれば、多くの支流藤原氏は学問や芸能の道によって家格を特権化し、その地位を確保しようとする動きも目立ってくる。和歌の家では、御子左家とはげしく対立抗争した六条藤家は顕季—顕輔—清輔とつづき、さらに顕昭・季経・経家らを擁もした一大勢力であり、また経信—俊頼—俊恵とつづく六条源家は通宗・通俊と対抗した。そして、通俊撰の『後拾遺和歌集』（応徳三年、一〇八六）、俊頼撰の『金葉和歌集』（大治二年、一一二七推定）、顕輔撰の『詞花和歌集』（仁平元年、

一一五一推定)、俊成撰の『千載和歌集』(文治四年、一一八八推定)と四つの勅撰歌集はほぼ一世紀の間に編纂されたことになる。この一世紀を通覧すると『後拾遺和歌集』の撰進は白河帝の院政開始と時期を同じくし、『金葉和歌集』の撰進は源平の武家の台頭と前後し、『詞花和歌集』の撰進より間もなく保元・平治の乱が起り、『千載和歌集』撰進の院宣が後白河上皇から下った寿永二年(一一八三)は木曾義仲が越中より京に入った年であり、撰進された文治四年より三年前に平家一門は長門壇ノ浦で潰滅(かいめつ)している。このようにこの一世紀は院政の時代であるとともに武家の勃興から政治権力の制覇へとつらなる異常な激動期であったことが理解されよう。しかもこの時期に四つの勅撰歌集が編まれていることは奇異の観もないではないが、裏返せば、激動の時代に処して専門化した家格を保持するために情熱と執心を燃やした中流公家の生きざまと、現実からの疎外感を詠歌によって補填(ほてん)しようとした美の使徒の厳しい面輪(おもて)をみとることもできよう。一御子左家の道統を継ぐ俊成は『千載和歌集』の撰進によって、ようやく歌壇の制覇を成就したといえようし、時に定家は二十七歳であった。

〇春の夜の夢の浮橋とだえて峯にわかるゝ横雲の空

この歌は「仁和寺五十首」の一つで、『新古今集』にも収められた建久九年夏(定家三十七歳)

の作である。この一首は定家の作風のすぐれた見本であるばかりでなく、その作風のよって立つ地盤や風体の得失まですっかり畳みこんだような、きわめて象徴的なものとなっている。春の夜の夢も見はてずに暁の眠りより目ざめると、窓外はるかに峯を離れゆく横雲が瞳に映じた、という歌意である。上の句の朧々とした心景が下の句のけざやかな実景に渡しこまれるあたりは無縫の巧みというべきだし、夢現のけじめもさだかならぬ心象がいつしか物象の風景に溶解されて、これほどに安定した形姿と声調を保ちえていることも妙である。

春の夜の夢のごとくにも甘美な前代への思慕と回想を託した浮橋も今や中絶えんとして、夢さめた瞳にまさしく映し出されたものは、浮橋ならぬ暁を告げる横雲の空であった。西海のはてに一門ごとく入水して平家が滅亡したのは寿永四年（一一八五）の二月、定家二十四歳のときであったが、すでに治承四年（一一八〇）の夏には以仁王を奉じた頼政の挙兵があり、一瞬にして京洛の内外は腥風に包まれてしまった。にわかに遷都の噂も聞こえ、八月にはいよいよ源氏の棟梁頼朝が伊豆に兵を挙げたため、追討軍は都大路をとどろかせて東国に下った。十九歳という多感な青春を迎えた定家は、この年の二月から日記『明月記』の筆を起しており、嘉禎元年（一二三五）の歳末で擱筆という、実に半世紀余にわたる長大にして克明な記録となる。その起筆の年の二月十四日の記事を抄出してみよう。

天晴、明月無^ニ片雲。庭梅盛開、芬芳四散。家中無^レ人、一身徘徊、夜深歸^ニ寢所。燈髣髴、猶無^ニ付^レ寢之心、更出^ニ南方^ニ見^ル梅花之間、忽聞^ニ炎上之由^ヲ。(下略)

明月の夜、寝つかれぬままに庭前の梅花をもとめて逍遙する定家の姿には、多感多情の青春像が浮き出てこよう。

頼朝が挙兵した翌年にあたる九月の日記には「世上乱逆追討雖^モ滿^リ耳不^レ注^セ之。紅旗征戎非^ニ吾事^ニ」^{ガニ}と断言している。いうまでもなく紅旗は追討軍の平家の旗幟である。世上の乱闘を源平の武門の角逐とみて、紅旗征戎のことはわが関知するところではないといふのである。けれども、そのように自分に言い聞かせてみても、日々荒廢に歸してゆく都のさまを眼前にしては、新しい東方の動靜に無関心でいられるわけもなかったし、それ以上に崩れゆく都の運命はそのままに公家の運命として響く痛切な実感をゆり動かしたことであろう。「紅旗征戎云々」とするしつけた同じ月の十五日の日記には、都の荒廢を叙して次のように伝えている。

入^リ夜明月蒼然。故鄉寂^ハ而不^レ聞^ル車馬之聲。步縱容^ニ而遊^ニ六条院^ノ辺。夜漸欲^ク半、天中有^ニ光物^ニ。其勢鞠^カ之程歟。其色如^ク燃火^ノ、忽然^ト如^レ躍、似^{タリ}自^{ヨリ}坤^ノ赴^{クニ}良。須臾^ニ破裂^シ、如^ク打^ツ火^ノ、散^シ空中^ニ了^ル。若是大流星歟、驚奇。

つづけて十月二十七日の記事にいう。

遷都之後不^レ幾^{イハバクナラ}、蔓草^チ滿^ニ庭^ニ、立^タ節^ハ多^ク顛^シ倒^シ、古木^シ黃^シ葉^リ有^リ蕭^ソ索^ソ之^ノ色^シ。傷^ム心^{コト}如^シ箕^ハ子^ノ之^ノ過^グ、股^ツ墟^ガ。昏^ヒ黑^ク向^ヒ土^ニ御^ミ門^ノ末^ノ法^ノ成^ニ寺^ノ辺^ニ、弥^{イヨイヨ}以^テ冷^レ然^{タリ}。

箕子は殷の紂王を諫めて聴かれず、佯狂して奴となる。周の武王によって殷は亡び、箕子は武王に厚遇され、殷の故墟を過ぎるとき麦秀歌を作ったと『史記』に出ている。六月に福原への遷都は実施されたが、定家は都にとどまった。遷都の後の都はもはや故郷を呼ばなければならなかったが、晩秋の良夜、蒼然たる月光を浴びながら、車馬の響もまったく途絶えた都大路をひとり逍遙する定家の傷心の姿は、この簡略な記述に残りなく描き出されている。冬に入ると蔓草は刈り取る人もないままに庭前を蔽い、住む人もない家々は軒端も朽ちるに任せたこの廢墟は、黄葉も蕭索の色をまして、ひとしお落莫たるものがあつたろう。

もはや都を故郷とする思いには、都は古い回想のなかに生きようとし、崩れゆく都によせる深い傷心はいつしか遙かな憧憬をよびさますことにもなる。回想として生きる都は現実のものというよりは、もはや夢裡にのみたどられるものであつたし、都に対する憧憬は思いはるかな浮橋を渡るようなものであつた。齡二十にも満たぬ青春の日に、すでに定家の柔かく傷きやすい心には夢の浮橋が架けはじめられていたと思われる。

忘れてならぬことは、定家の心に深く刻まれた浮橋として『源氏物語』の終章があつたことで

ある。「夢の浮橋」と題された五十四帖の終章には、行くところまで行きついて安易な解決や希望など厳しく拒否するような、いわば情感と道念の高い姿が描かれていた。そこには公家の精神と文化がその成熟と矛盾を同時に象徴するようないみじき姿があったし、したがっては、定家の時代の無慚むざんさも、またこれを回想としてひるがえすことによって最後の形を完成する日の約束もそこに予告されていたといってもよい。『源氏物語』によって架けられた夢の浮橋は、さまざまに思いと課題をはらむ運命の橋として、それからも渡りつがれることになったが、治承・寿永の動乱騒擾そうじょうの日を経て今や中絶えんとするとき、平家一門の最期が西海に尾をひく落陣らくじんにも似ていたように、その終焉のかがやかしい光芒につらぬかれた夢の浮橋が定家によって映し出されたのであった。いわば、『源氏物語』と『平家物語』と、この二つの壮大な悲曲をつなぐ虹霓こうがいがこの哀れな夢の浮橋であったといってもよい。

「ただ春の夜の夢のごとし」と盛衰の理を説いた平曲の序章のごとく、この浮橋も浮世の夢幻と危うさの心に支えられたものであるが、同時にそれは一切を喪失したはてにもなおかつ繋ぎとめなければならぬとされた情感と道念のかけはしでもあった。あるいは、ただ一色の諦観ていかんの底になお一筋の希望として懐きたもたれた美と倫理の象徴でもあった。陶酔と覚醒かくせいが冷たく交流するような複雑な心理の網目をくぐって澄みのぼる噴気が、きわめて自覺的な賦活作用としてそこに